

# 反戦会議通信

NO. 7  
'68.10.17

本日の斗争委員会に総集された總ての斗争の諸君、及び総てのオアサーべーの諸君!!

我々の百数十余日にも及ぶ筑波移転実力阻止ストライキ斗争は、九月二十五日文学部学生大会を境に大きく転換を見せたことを、我々はまず確認しなければならない。即ち、オ一に 教授会に流動化状態がみられる二と、オニに、学生内部に明確な形での路線上の対立が顕在化して二ること、オ三に、斗争勝利のための方針が「討學長・評議会衆同交東現」にしばられてきて二ること、オ四に、斗争の現局面の客観的評価として、我々の内部に於て弛緩状況が見られる二ことである。

オ一の問題に於けるならば、教授会の動搖と分離とによる流动化である。即ち、農学部教授会の調査費計上撤回、文理部教授会の「四十名声明」、さらにまた、調査費の一箇月凍結のうわや等、筑波移転進体制とのものの動搖である。このような教授会の流动化をもたらしたものこそ、我々の百数十日余にも及ぶ、本館・E棟・バリケード占拠の実力斗争であつたことをさしてそれが中心とする全学系との実現であつたことを、確認しなければならない。帝國斗争の直接的効果が何であれ、斗争が帝國主義国家权力と直撃的に非妥協的な斗争として結果するといふ帝國斗争の一般的範囲の中で、教授会が既成の大学自治に固執することによつて、权力の末端化し、我々と全面的に対決せざるをえないという二点と、そして、我々が帝國主義国家权力に直撃的に対決する実力斗争をあしらへていく過程に於て、教授会そのものが、その「改良主義」的「インテリゲンチヤ」的性格のために動搖化せざるをえなくなることは、つきり示したもののが、農学部教授会の調査費凍結であったと言えどであろう。文理部教授会の「四十名声明」に見られる如き内部解は、筑波移転進派の反対派たる文理部教授会への策動の結果的産物として見られるだろ。そしてそれ自身は、推進派が、移転阻止をかかげる学生に対して、あくまでもそれを推しますが、学生に対する地殻固めとしての文理部教授会の外断化をはかるものとして文理部教授会内部に反乱を起してしまった。

ものであった。

我々が一貫して堅持してきた実力斗争の結果に他ならぬのであり、現在の様々左力関係の表現である「調査費一年凍結」を頂点とする様々なる妥協的路線を排し、筑波移転阻止斗争が最後的勝利の日までキラリと、我々内部にはねかえてくるとして堅持しうるか否かという、我々内部にはねかえてくる問題として存在する。そのことはオニの問題にも關係していくことである。

オニに学生内部の対立の顕在化である。即ち、一方に於て本館封鎖解除と筑波移転阻止の斗争を学内民主化に詰い合ひ路線へ歪曲し、六・二〇調査費計上白紙撤回をもつてスト終結をほかうとする旧執行部(二日共民青系)諸君の路線と、他方に於て 筑波移転阻止を徹底した実力斗争として展開、堅持する我々を含めた文自斗を中心とした路線との対決である。学内民主化、六・二〇白紙撤回路線の犯罪性は、オ一に、「学内民主化」を唱えることにより、学友会筑波そのものの対決から回避される二と、オニに「学内各局の話し合い」によって、筑波ものが解決しあるかのようない幻想を学友に抱かせる二とである。それは、討評会衆と我々学生との非和解性的対立をイノベイシ、「対話」の中に解消せよとするものである。そのような路線上の対立は、助手会 ティーチ・インで爆発した。日共・民青系のティーチ・インをめぐつての全くのジガホク路線は論外としても、我々はここで明確に、文自斗指向部多数派II相改系諸君のティーチ・インをめぐつての全くのジガホク路線を批判しておかなければならない。それは、單にティーチ・インのみにとどまらず、我々の斗争が徹底した実力斗争として展開しなるためにも、絶対的に必要だとなのである。ティーチ・インについて彼らの取った最初の態度は、その効果をテテスマイナスにふり出され、アラスカ、バドーからそれに入らしくしてじうの結果論と、やたらに自主和解路線の延長線上につけ